

道と兵隊

根井友信

二月〇日

朝らかに晴れた好日和、上々の飛行日だと勇んで〇〇飛行場へ馳せつけたが目的地の南寧附近が氣象悪く飛ぶかどうか分らない。今連絡を取つてゐるところだ、との事で待たされる。臺北から、新しい旅客機が着いたり他の飛行機が幾臺も飛び出したりしてゐる。白雲山はくつきりと浮き出して美しい。

正午をかなり過ぎてから漸く飛ぶことに決定、ほつとする、さア乗り込んでくれと言はれて中華航空のエーテー型〇〇〇機にもぐり込む。颯と滑走、浮揚、飛行場を一旋回してゐる間に僚機と一緒にになり、〇機編隊で機首を西方へ向ける。我々の宿舎が眼下に見え兵隊の動きも分る。ハンカチでも振つてやりたい誇らしきを感じず。

幾つもの曲つた川が白く光つてゐる。田圃や部落や山の肌など綺麗な繪模様である。

うつとり俯瞰圖に見落れてゐる内に機は次第に上昇する。前方

の山脈が雲を被つてゐるのだ。何時か全く雲の上に出て下界が見えなくなる。陽光が燦々と硝子の天窗を通して射し込み汗が流れる。果なき雲海を越えて悠々と快翔、天人の爽快さを満喫する。稀に高い山頂が突き出て居る。曾て富士山に登つた折のことが思ひ出される。

山脈を越えたら又下界が顯はれ高度が次第に下つて三百米位になる敵地の上である。撃たれるかも知れないと敵兵を探したが馴れない眼には見當らぬ。然し地上の有様は手に取るやうにはつきり分る。部落の様子、水牛の動き、人が荷を負ふて歩いてゐるのなど一々指摘出来る。道路がどれも黒い點線のやうになつてをり、通行人が黒い所を避けて縁の細い線を辿つてゐる。奇異な氣持ちで見凝めてゐたが其の内戦車騒だと氣附く、皇軍の進攻の聲に怯えた破壊の跡である。何と思ひ切つて此れだけ迄に破壊したものが、道路と云ふ道路を總て見渡す限り寸断してゐる。此處もかた不審に思はれる程の山間の細い道にまで及んでゐる。今迄にも幾

度となく敵の破壊方の大きいのに呆れたけれど此れは又特に掃滅的である。

皇軍が全然振り向きもせず、反つて地方良民を苦しめるに過ぎないこんな地域までも無暗矢鱈に破壊しないであらなかつた彼等の恐怖心と狼狽振りを考へると餘りにも其の愚かさが哀れまれる。然も口では「公路建設は現代的軍隊責務」と稱へてゐる彼等である。馬鹿らしくて笑ふことも出来ない。

其の内に陽光が次第に鈍つて鬱陶しい天候になる。視界も霞んでくる。後方の機關銃手と何か信號が交はされる。時折無電士から操縦士へ紙片が渡される。氣象通報らしい。どんな事が書かれてあるかと首を伸して後ろから覗いて見たら「○○機、○○機共に氣象不良の爲め○○へ引き返した」とある。窓外を見れば何時か僚機が居ない。我々のが唯一機である。機體の動揺が激しくなる手帳に書く字が躍つて分らない。硝子に沫がかゝつて水玉が流れる。雨だ。如何にも氣象が悪い。折角此處まで來たのに我々の機も引き返すのだらうか。時計を見れば既に二時間餘を經過してゐる。もうそろ／＼目的地に近い頃だ。機關士の方を窺へば地圖を開いて操縦士と顔を合はせて話してゐる。プロペラの響で全然聞えないが引き返す相談ではなく、どうやら目的地を探してゐるらしい。機は全く雨雲に閉ぢ籠められて何も見えない。地上も分らず、山もない。プロペラだけが同じ調子で力強く咆哮してゐる。

今迄は考へもしなかつたことであるが、若し清陸地が見當らず空で迷つたとしたらどうなるだらう。未知不案内、然も附近一帯は敵の巢窟である。誰に聞きやうも何の目標もない。無電だけで果して正確な位置が確め得るか。迷ひにも色々あるが凡そ空で迷ふ位困ることはないであらう。

そんなことを考へながら機關士や操縦士の顔を見たら、平然として少しの不安な色もない。何だか自分の氣持ちが恥かしくなる。果して自信に満ちた機は引き返しもせず迷ひもせず次第に下降するらしい下界が段々展けて來た。蒼江らしい青々とした流れが廻つてゐる。操縦士の指さす彼方に大きな街がある。水道の貯水タンクらしい塔が目立つ。目的地南寧である。

蒋介石が躍起に工事を急いだ柳州への鐵道が路盤だけ出來て北東へ走つてゐる。今日あたり戰況酣な筈の賓陽の空を望んだがすつかり霞んでゐる氣配も窺はれぬ。

飛行場が見附かる。澤山の飛行機が所狭しと列んでをり大勢の人が動いてゐる。機は旋回しながら下降する。地面が盛り上つて來る。プロペラの回轉が緩む。悠然と着陸、何のことはない。無事平安。

飛行場から自動車で眞直ぐ司令部へ走る。街は近代的な相貌を備へ。街路は坦々たるアスファルト鋪装である。學生軍の署名で書かれた抗日文字や繪畫がまだでか／＼と残つてゐる。流星に廣

西勢力の本據だけあると合點される。
司令部で〇〇參謀から命令を受ける。

二月〇日

「お迎へが来てゐます」と兵站宿舎の兵に起され慌てゝ飛び出す。七時、眞暗である。雨がしほく降つてゐて寒さが身に沁む。

迎への自動車で闇の街を衝つ切り葛江の軍橋を渡つて〇〇部隊へ行く。自動貨車(トラック)の一臺に便乗させて貰ひ、八時近く出發する。自動貨車〇箇隊の〇〇〇臺、蜿蜒長蛇の行列、前燈の閃めきが壯觀である。

東が白んで來て次第に夜が明ける。雨も止む、かなりの快速である。道路幅員が七米位路面が滑らかで曲線勾配も良い。支那にも此んな良い道があるのかと不審になり、運轉手に聞けば吳村墟までの儘かの距離に過ぎないと、地圖を開いて見たら成る程佛印からの撥蔭ルートの一部に當つてゐる。

九時、吳村墟に到着する。メーターに依ると時速約二十五軒で走つたことになる。

此處からは急に道が悪くなる。元來が粗末なものであつたのに敵が急入りに破壊したので殆ど原形をとどめてゐない。それを應急に手入れたとけとて自動貨車は水溜りを突切つたり土山を越えたり、或は畑を廻り岡を縫ふて進まなければならぬ。塘報墟

までの一時間、距離十七軒、果して速度がぐいと落ちてしまつた。

部落の傍の深い川には隔つた民船で架けられた「吊〇〇橋」と云ふ軍橋が半分水に浸つてをり、橋の袂に建てられた陸軍大尉〇〇〇臺其の他數基が占領當時の激戦を物語つてゐる。頑強執拗な慶西軍を撃破急進した有様が偲はれて胸が熱くなる。

自動貨車の行列は段々地形複雑な山間へ掛り、道路は益々悪くなる。昨日機上から見た破壊の狀態が至る處にまざ〜と晒け出されてゐる。三角、四角、稜形、電光形など種々幾何學的な形の戦車壕が切れ間もなく續いてゐる。其のどれもが深さ三米から五米位もあり、然も出鱈目でなく定規を當てたやうに垂直に掘り下げた。又盛土部分などは全く取り拂つて濕地とし切り土部へ尙濠を穿つて水を泄へてをる。敵が此れに費やした努力を推定して見ると實に恐ろしい數字に達する。唯呆れるばかりだ。それだけに修復は容易でない。皇軍は止むなく迂回路を造つたり、樹木を架け渡したり、或は山腹を崩し崖を削り、無理矢理に通行出来るだけにして置く、従つて勾配も曲線も極端である。

我が自動貨車は上下左右に激動しながら懸命に進む。運轉手の苦勞は一方でない。

「何とひどい道だらう」と呟けば運轉手は「此れでもうんと長くなつたです。先月の中頃迄は大塘墟で泊つて二日掛りでした」と

言ふ。

その大塙墟へ着いたのが正午過ぎ、メーターと合はせて今度は時速僅かに十二軒であつたことを知る。大休止で冷たい握り飯を喰ふ。廢墟のやうな部落へ入つて見る。貧弱な家並であるが此の邊での要衝である。通路にはよく見かける板石が敷き並べてある。

海軍の飛行機が盛んに飛んでゐる。賓陽作戰の協力か、昨日より天候が良いので荒鷲がどんなにか活躍してゐることであらう。

十四時半、北進の自動車隊が到着したので入り代つて出發する。幾箇所か交叉待避所が設けてあるけれど大部隊の交叉は此處と決つてゐるらしい。道は相變らず悪い。方角を失つてまごつく程軒餘曲折、然も道幅は自動車のタイヤ一杯である。一つハンドルを取り違へたら自動貨車諸共に谷底に潰されてしまふ。幾度か膽を冷やす、ほつとした途端に泥濘に嵌り込む。危ふく横倒しを遁れて跳ね上る。が今度は撥き出されさうになつて獅嘯み附く、脊骨を打つたり、肱を突當てたり、身體を揉みくたにされる。

何處迄も難路は續き、走らうにも走れない。肚が立つてくる。那曉墟、大洞などを漸く通過する。時速はやはり十二軒である。敵兵の遺棄死體や馬の死骸が至る所に放置されており、眞黒な瘦せ犬がたかつてゐるのも凄慘である。

工兵隊が道の悪い所を選んで修理してゐる。肌脱ぎになつて十宇缺を振り奪を擔いでゐる。其の腕から汗が滴り落ちる。

「あの方が〇〇部隊長です」と運轉手の教へてくれる所に、白い鬚の多い長身の將校が盛んに指揮してゐられる。

此の長い道此の惡道、補修でなく全くの新設である。如何に手を盡くしても満足な道になりさうもない。限りなく大きな物に對して振り上げる其の一歎々々に奪ひ汗と膏が注がれる。感謝に堪へない。自動貨車の砂塵を振りかけて過ぎることが何となく申譯ない。各自動車から作業隊へ「御苦勞さん」「有り難う」の感謝の聲が投げられる。

工兵隊のさうした努力の御蔭であらう。奇麗圩、竹山を経て小董墟に至る十八軒を約一時間で走る。内地を思はせるやうな綺麗な流れの小董河に架かる應急橋は割にしつかりしてゐた。

昨日司令部でよく氣を附けるやうにと注意されたのであつた。持つてゐる地圖にはつきりと赤鉛筆で敵狀が記入してある。薪編〇〇師などを含む敵の〇箇師が此の兵站線の兩側に蟠居してゐて絶えず狙つてゐるのだ。

「毎日のやうによく出て來、多い日には四度も襲はれました。今日あたりも出さうだと云ふことでしたが……」

と運轉手は言ふ。

「僕が乗つたので遠慮してくれたか」

と笑ふ。

自動車の隊列が巻き上げる砂塵は濛々と邊り一面に立ち籠めて

「五米以上間隔を開けてはいけません」と云ふ其の前方の車すら見えない位である。運轉手の顔は黄粉を被つたやうに眞黒である。僕の顔も同じに違ひない。全身も黄粉まみれだ。

大綱、平樂橋などを経て欽縣までの三十三軒は時速十五軒であつた。此れで呉村墟からの難路一〇七軒、走行時間約八時間、平均時速十三軒になる。

何と酷い道であつたことか。

目的の欽縣へ着いたのが黃昏れの十九時半、明るい内に着いたのは非常に好調であつたのだ、とのことである。

町の入口に中山公園がある。家並も立派で殆んど壊はれてゐない街路はしつかりしたコンクリート舗装が行き届いてゐる。

どんなにか疲れたに違ひない運轉手は此れから車體の手入れをし(大概スプリングの二二枚は折れてゐると)明朝七時出發の爲めの積載もやり、身體を拭き夕食をして寝るのは大抵夜半の二時頃になるとか。

今日一日世話をかけた禮を述べ、健在を祈つて別れる。

二月〇日

晴れて暖かい、欽江の河原へ出て洗面する。兵站炊事場の横に小孩達が殘飯を貰ひに集まつてゐる。地方民は見かけない。

十時、〇〇兵團連絡所から乗用車を借りて出發する。街を出は

づれた所の飛行場には民工(ミコン)が澤山に働いてゐる。道路は粗末であるが平坦で幅員も四米以上ある。何處も同じく路面には砂利一粒もなく砂塵が舞ひ上る。氾濫時期には此の邊一帯に浸水し、水深が一米にも及ぶとか、其の内に對策が講ぜられるとも云はれてゐる。

道は進むに連れて丘陵地へ寄つてをり橋は殆んど耐久的構造になつてゐる。昨日走つた欽寧間の應急橋には〇〇部隊だの〇〇部隊だの、部隊名が入へつてゐたのに此の路線の橋は殆んど〇〇部隊である。翁英作戦で一緒になつたことが思ひ浮ぶ。

農民が彼方此方で働いてをり、日の丸の小旗を持つた小孩が水牛を追つてゐる。至つて平和な姿である。

長坡で道は二つに別れ、北走してゐるのが蚊蟲山行、僕は其の儘西走する。金雞塘と〇〇の棧橋を視、長い字品橋を渡つて十一時過ぎ推車嶺に到着する。乗用單車の關係もあるが時速二十三軒で走つたことになる。

其處に集積されてゐる軍需品の山に驚き、此れだけの物資を造り出す銃後も亦大變なりと思ふ。揚搭場へ行く、沖合の本船と連絡する海上トラクヤヤンマ、大小發艇などの活動が目覺しい。

約一時間、偵察や連絡で走り廻つてから、蚊蟲山の方へ廻る。此處も軍需品の山である。北支の淮河でお世話になつた〇〇少佐に偶然お會ひして驚く、中食を御馳走になりながら、此の方面に

敵前上陸を決定された當時の壯烈なるお話を聞く。

暮れぬ内にと慌て、欽縣へ走せ戻り、兵團連絡所で賓陽作戰の大戦果を聞いて胸躍らす。昨日と同じやうに○○兵站へ寄つて手續をとり、毛布二枚と蠟燭一本を受けて宿舎へ入る。がらんと物寂しい部屋の隅に誰の惡戯か襖籠が一つころがつてゐる。

唯一本の蠟燭の盡きない内にと、急いで報告書を書く。

三月〇〇日

朝から物凄、雷鳴、猛雨、此頃よくある襲雨に足尾を挫かれてぼんやり出入口に佇む。

故園を出てから丸二年、北支から次第に南下して今は南支もすくなく西南端に寄つた此處、よくも生きよくも來たものかなとつくづく不思議になる。先月の始め飛行機で偵察に來た時にはまさかと思つてゐた此の欽寧間へ入つてからでも早や一ヶ月になる。推車嶺から着手した我々の作業も既に○○餘料に達し逐次進捗してゐる。最近入院患者が割合に多くそれだけが氣掛りであるけれど其の他には大した事故もなく平穩であることが有り難い。九時半頃、襲雨ががあつてからりと晴れる。今日は先づ○○隊の作業を見やうと當番の望月兵を連れて平樂橋南端へ出て行く。

公路上で北進の行軍部隊に妨げられて立ち止まる。前線への補充部隊であらう。一つ星の若々しい張り切つた兵ばかりである。

先刻の襲雨でぐつしより濡れた身體が今度は遠慮のない太陽に灼きつけられてもうくと湯気が立つてゐる。咽せるやうな汗の匂がむつと迫まつて恐ろしい程の氣慨が感ぜられる。鐵兜を被り重い裝具を着けて、拭きやうもない汗を垂らしながら無言で颯々と前進する。その力強い軍靴の響が勇ましい。

何部隊かと聞けば○○部隊だと答へて行く。今頃此處を通るのでは欽縣を暗い内に立つて來たに違ひない。頼母しさと可憐さにと胸打たれ何時迄も見送つてゐる。

○○隊の作業を指導してから其處の山頂に上り敵が放置して行つたコンクリートトーチカ上に降り込んで辨當を喰べる。

緑の天鵞絨で包んだやうななだらかな山々が美しい。若草崩える春、實に長閑かである。ぽか／＼と暖かく眠くなる。

突然、何處かで銃聲數發、匪賊でも出たのか、それとも誰か、雉子でも撃つたのか、後は又静かになる。

トーチカの蔭で景色を眺めながらのう／＼と野糞をし、午後は○○隊の方へ廻る。介排村の道路沿で攻々營々、懸命な努力で作業は豫期以上に進捗してゐる。○○中尉が駆け廻つて指揮してをり容喩の必要もない程好調である。下手に口出しすれば反へつて邪魔になりさうなので丘陵に腰下ろして日向ぼっこしながら他部隊の道路修理を眺めてゐる。最近煩として襲つて來る猛雨の爲め道路破損、交通杜絶と云つたことが時折起り、我々の僅かな糧秣

資材さへ補給困難である。それで二三日前から約〇〇名の歩兵部隊が全路線に配置され兵站路の確保に任じたとか、今働いてゐるのも歩兵らしい。

兵站路は軍の生命線であり其の輸送状態は作戦を左右するとなつて云はれる。然しかくも大々的に着手されたのは單なる確保でなく餘程の輸送増強が企圖せられたものらしい。作業が道路補修でなく全くの改良である。命令が「先づ一週間で幅一米以上深五十厘以上の排水溝を構築しろ」と云ふのだとか、唯側溝だけを掘つてゐる。

成る程と合點される。此の頃の雨量に對し現在の道路ではどんなにか被害が多いであらう。何としても完全な排水溝が第一に必要である。道路の維持は排水にありで確かに適切妥當な方針である。然も幅一米以上と單一的にあつさり言ひ切つたところ如何にも戰場らしく且つ現地に即してゐて巧妙である。此んなことを獨りで感心してゐる時大きな聲に驚かされる。怒鳴つてゐるのは下士官らしく相手は脊を撥いでゐるところだ兵である。兵は直ぐに跳ね起きて脊を撥ぐ、怪しげな急造番には幾らの土も入つてゐないが兵の睥附は不安定に隣めく、無理もない。

又歩兵用の小圓匙でこつ／＼溝を掘つてゐるが少しづつより掘き取れず、作業は至つて遅々たるものである。いくら突撃に巧みな歩兵でも不馴れた作業には困るらしい。我々が戦闘もするから

と云つて歩兵にまで道路造りをさせてよいと云ふ理由はない。實に氣の毒である。それでも兵隊は黙々として地まじ働き續ける。何か見えてゐられない氣がして立ち上る。其處へ望月兵が飯盒で語を煮て持つて来る。再び腰を下ろして喰べる。實にうまい、殆んど一人で喰べてしまふ。何處から持つて來たかと聞けば、百姓が働いてゐた所で煙草と交換して來たと言ふ。煙草に不自由してゐる昨今、惜しいことをしたなど、我ながら淺間しい考が浮ぶ。此れも道路が悪く物資が届かない爲めか。

夕刻池下上等兵が愛馬「平成」を持つて迎へに來たので道路見物旁々大幅迄一走り往復する。何處でも側溝ばかり造くつてゐる。暗くなりかけてゐるのに無關心で働いてゐる。

宿舎へ戻つた途端に、部隊長から電話ある。

「道路側からの註文で鐵道と道路との交叉箇所は特別の理由がない限り高低交叉にすることになつたから計畫を變更するやうにと、

おや／＼、僕が内地では道路側に立ち、戦地では鐵道側に立つて同じ問題に關係するとは、何と面白い因縁かな。

四月〇〇日

前夜二十三時迄かゝつて漸く此處での作業を完了し、今日の轉進である。

望月兵に懸掛けられて目覺めたものゝ、寢不足と疲労とで仲々起き出し難い。全員集合を終へるとの事に飛び出して行き、作業隊と轉進隊とに分け警戒並行軍序列の命令を與へ先發させる。後でゆつくり仕度を整へ本部の坂中尉や内藤軍醫と共に歩き出す。今日も曇つてゐて蒸し暑い。長子局まで十九粒の徒歩轉進は餘り樂でない。個人装具を全部着けたので最初から肩が押さへ附けられ、いくら歩かない内に早や汗びつしよりである。それでも三人で冗談を言ひながら期らかな気分で行く。路傍に萼、野薔薇、其他名も知らぬ美しく花が咲いてゐる。坂中尉が白薔薇を手折つて、中村支隊長を思ひ出すと言ふ。此の間届いた新聞に、閣下の遺家族が野薔薇の一枝で故人を偲はれる記事があり、閣下が過ぐる賓陽作戦で壮烈な戦死を遂げられたことを知つたのだ。僕も白薔薇を手折る會て海州でお目にかゝつた時の温顔が浮ぶ。「いゝ香りだ」と言ふ内藤軍醫の聲に仰げば梅檀の花が今を盛りと咲き誇り、風も無いのに靜かに散つてゐる。

歩兵部隊が相變らず至る所で道普請をしてゐる。砂塵を浴び汗と泥に塗れて皆眞黒である。前週は幅員擴張と土留工事に専念してゐたのに今日は路面造りである。命令はどうなのかわからないけれど側溝の折と違つて各隊が夫々勝手な工法を採用してゐる。然しよく注意して観ると何れも現地資材を活用した適當な工法である。素人作業とは思はれぬ點が多い。部落近くでは破損家屋の煉

瓦を持つて來て敷き並べてゐる。路盤均しも上手である。岩石——と云つても頗りない硬さであるが——の採れる附近ではそれを碎いて敷き詰め粘土を振り掛けて目潰しにしてゐる。横斷勾配も適當である。田圃を横切る湿地では山の木を切り出して縦に並べ鐵線で結束してゐる。水に浸つても大丈夫である。小董河へ寄つた所では其處の河砂利をその儘運んで撤布してをり路面が滑らかである。

「〇〇部隊長が二十日間で此の道を時速三十粒程度にして見せると公言されたさうだ」

と坂中尉が言ふ。成る程あの部隊長の指導に依つて此の工法が實施されてるのであらう。と始めて合點される。それにしても、平均十五粒位しか走れぬ此の百粒餘の難路を僅か二十日間の作業で二倍の能力を發揮せしめるとは餘りにも無理な望である。それも工兵隊ばかりなら兎に角大部分が歩兵部隊や民工に依つてなされてゐる。僕は此れでも出征前は土木技術家であり道路専門家である。特に路面の維持修繕に就ては並々ならぬ苦勞を重ねて來たものである。その僕にはどうしても不可能としか結論し得ない。然し、考へ直して見れば僕が此う結論するのも内地の智識であり、戦地では内地の智識が應々にして裏切られることをよく知つてゐる僕である。我等の部隊長が口癖のやうに言はれる通り戦争技術は又獨特である。時には内地の常識が邪魔になることさへ

ある。戦争では常に不可能が可能である。僕が成し遂げて来た幾多の作業に於ても又戦闘に於てもさうだ。自分でも不思議に思ふ程の成果を擧げてゐる。喩へば大黄河の架橋である。延長七百米の橋梁を一ヶ月で完成しろと突然命ぜられた時には餘りのことに茫然としたものである。何等の確信もなかつたが唯無我夢中で測量計畫を始め材料準備に着手した。本作業を始めてからでも河底下八米根入りの打杭でかなりの日敷を費やしたり敵襲で思はぬ妨害を受けたりして計畫工程に齟齬を來たしたけれど、結局受命後一箇月以内で完了したのであつた。一々経過を辿つて考へれば單に爲すべきことを遂行したゞけで當然の成果ではあるが、内地の常識を以てしては矢張り不思議であり、奇蹟である。

理窟では説明附かず、どうしても奇蹟と云ふより外ない。戦争には奇蹟が平氣で起る。奇蹟の連続である。従つて三十軒速度の道路完成も亦可能であらう。擔任部隊長は戦地の道路では權威者と言はれてをり其の點僕は素人に近い、僕に何が言ひ得やうか、勝手に臆測することさへ僭越である。さう考へると今攻々として奇蹟を生みつゝある兵隊が崇高に見え其の動作がたどくしいだけに一層尊く感ぜられる。

「行軍は不得手だ、おい休まう」内藤軍醫が提案する。待つてゐましたとばかり道傍にとつかり座り込む。装具を解き肌を脱いでほつとする。まだ早いが序だからと辨當を開く、「今日も亦働か、

もう十日も續いたらうか」坂中尉が呟く、現地來のぼろ／＼と干鬮が二本である。此頃は毎日決つたやうに此ればかりである。折よく一緒になつた海老原衛生兵が枯草を集めて焼いてくれたものの、唾の切れた咽喉では甚だ喰べにくい、「何處かで語でも探して喰べやうぢやないか」と皆を促がして立ち上り、又重い軍装で歩き出す。ところが途中で同じく中食してゐる歩兵部隊が矢張り鬮だけを噛つてゐるではないか。警澤な心を起したことが何となく申譯なくなる。鬮でも結構奇蹟が生れるんだ。如何に不得手とは云へ僅かな行軍でへたばつては申譯ない。

「工兵はやりきれん、戦闘が懐しいぞ」ふとそんな聲が聞えた。無理もない。脊を擔いだ肩に血が滲んでゐる。我々にとつて行軍がやりきれんやうに歩兵にとつて脊擔ぎは不得手である。面白いもので不得手なことには兎角思ひ遣りが伴なふ。決して自分が苦しいとは言はない。工兵は辛苦多々の氣の毒だと歩兵は咬やき、工兵は砲を背負つて山谷を越える砲兵に同情する。砲兵は又輜重隊が一番可哀さうだと噂して居り、其の輜重隊は歩兵さんのことを思へば何ともありませんと言ふ。

勿論戦争である以上何兵が樂で何隊が苦勞だと云つた區別はない。皆同じく必死であり苦樂を超越してゐる。唯お互が同じ皇軍であり戦友である所に温かい同情が湧く、其の同情も僕をして言はしむるなら原因は總て道路にある。道路が悪い爲めの苦勞であ

り同情である。何と支那と云ふ所には道路がないのか道路らしいものは一本もなく皇軍の憫むこと一方でない。あの歐洲の戦野では機械化部隊が自由自在な行動をとり、獨逸軍が快速を恣にしてゐる。實に羨ましい限りである。道路は確かに文化のパロメーターで、道のない支那はそれだけの國である。今の支那は道のないことで一切を説明してゐる。早く事變が完遂され、日本の指導の許に道路のある國に再建設されることを祈る。

十五時、長子局に到着する。幾軒もない家屋には警備隊が入つてゐるので當分我々は天幕露營である。

五月〇日

衛兵司令の田子軍曹に起される。幾時頃か、まだ暗い。報告によると約一時間程前から東方一杆半位の所で輕銃機の音が連續し、部落民がぞろ／＼逃げて来る。それに聞いたら約七八十位の敵兵が襲來したとの事である。耳を澄ませば成る程銃聲がする。〇〇隊から〇ヶ分隊を出して河畔で警戒に附くやう手配する。本部と連絡を取つたが情報も入つてゐない。その儘起きて待つてゐたがそれきり何の事もない。

過日捻子坪驛が敵襲を受け〇〇部隊で〇名の犠牲者を出してをり、那扁村北方では警備隊が討伐に出たとの事である。この頃少し不穩になつて來た。注意しなければならぬ。本部から電話で、

「大唐墟のルートに就て部隊長と軍參謀とが巡察されるから十三時迄に行つて説明しろ」と命令が来る。望月兵に午後から乗馬を準備するやう言ひ置いて表へ出る。幸に好天である。作業員は既に出拂つて宿舎の方はがらんとしてゐる。軒先のボンカンがかなり大きくなり多少色附いて來た。榕樹の下に皇協隊員(俘虜)が一人寝てゐる。衛兵に訊けばマラリヤらしいと答へる。日頃マラリヤに抵抗力の強い彼等にしては可笑しいと思つたので軍醫に連絡をとるやう命じて置く、

架橋場へ行つたら、今日は三基の築頭櫃が盛んに打杭をやつてゐて賑はしい。民工の音頭も漸くものになつて「マッコ、マッコ、マッコ」が南の山へ銜する。皇協隊もすつかり兵隊と仲良しになつてゐる。彼等支那人は着衣で平氣だが兵隊は皆禪一つの眞裸である。赤銅色に磨かれた肌は水に浸つたやうな汗である。立つてゐるだけの僕でさへ拭き切れない汗である。ぢり／＼灼きつける南國の太陽は針で刺すやうに沁みる。骨の中まで溶けるさうだ。五月と云ふのに此の暑さでは眞夏にでもなつたら何とする。〇〇部隊の兵が「夏になれば電線に止まつた小鳥が其の儘焼鳥になつて落ちて來る」と言つたとか、萬更ら冗談だと濟まされんやうな氣もする。

散々苦心した木材搬出も漸く順調になつてどし／＼到着する。木工班にその區分や木取り方法を指示してゐたら急に暗くなつて來た。あつ來たなと思ふ間もなくさうつ、と叩き附けるやうな

襲雨、降るのでなく水が落ちるのだ。正に瀧である。目先は見えず、息も詰まりさうだ。それにびかり、がらくらく、耳を劈くばかりの鋭い雷鳴が頭のすぐ上です。身體が竦む。

作業人員も手段なく杲然と立つてゐる。槽の上の者も下りる間もなく唯振り落されんやうに獅嘯み附いてゐる。何時もと違つて仲々霽れない。過ぎ去るのが待ち遠しい。防暑帽はべしやんこに歪んでしまふ。襟から注ぎ込む水は肌を流れて一氣に爪先まで走る。地面に溜つた水は靴を没してゐる。

約一時間以上も降り續いたらうか、やつと止む、^{ホライ}開工！開工！^{ホライ}彼方此方で兵隊が叫ぶ作業が續行される。強い太陽が又照り附ける。一時冷やされた身體が今度は蒸し立てられる。眞裸の兵隊はよいが僕のやうに着衣の者はたまらない。湯氣に包まれて恰度蒸し風呂へ入つてゐるやうだ。身體を動かすと臍や股の所がぐしょぐしょと鳴る。足は靴の中で遊いでゐる。氣持の悪いこと夥しい。

日頃綺麗な小董河の水も早や濁つて来る。山上の下土階が立てた日の丸の旗が濁んでゐる。

作業場を廻つて各隊に午後の作業に對する所要の指示を與へ、神田中尉に後を頼んで宿舍へ歸る。望月兵に手傳はせてすつかり着換へる。炊事の姑娘が笑つてゐる。

事務室に居た林上等兵に車が動くかと聞けば動くと言ふ。それ

で乗馬の豫定を變へてぼろ自動車で出かけることにする。ラヂエーターに彈痕があつて、石鹼で詰めては置くものゝ度々水を飲ませねばならない厄介な舊式鹵獲品、それでも乗用車だけに乗馬よりは樂である。今日は小林傳令を連れて出る。自動車の中も蒸し風呂に等しい。言ふまいとすれど思はず暑いと呟いてしまふ。

竹山附近は路面が悪く動揺が激しい。座席で踊り廻り幾度天井へ頭を打ち附けたことか、此の邊に珍らしく玉石の多い山があつてそれが路面に敷き詰めである。たゞ小粒のが得られず土砂で目潰しゝた爲め雨でつすかり洗はれて玉石の面が露出してゐる。強固な道路ではあるが走ることが出来ない。

奇麗町から蘇煥村附近迄の十五軒は路面が實に滑らかだ。素的なドライブウェイである。水綿の峠なども見違へる程に改良されてゐる。一般に線形は良くなり幅員も廣くなつた。我々が五二軒附近の道路沿作業をやつてゐる時、道路幅員に六米を残すやう注意されたが矢張り何處もそれ位ありさうだ。路肩もしつかりしてゐて危険の虞はない。曾て見た戦車壕なども綺麗に埋められて跡形もなく軍橋も強固な板橋に變つてゐる。

もう交通杜絶の心配はなく絶対安全な道路である。如何なる輸送をも充たす確實な兵站路である。既に歩兵部隊は引き拂つて一人も居ない。道路が完成したのだ。あの悪道、あの難路を遂に征服したのだ。蠶を喰へ襲雨に叩かれながら注いだ幾多の尊い汗と

膏とは遂に奇蹟を生んだのだ。

お蔭で我々も此頃冷凍魚の御馳走にあり附いてゐる。

○部隊長の言はれた三十軒速度になつてゐるかどうか、ぼろ自動車の單車であり途中水の補給をしたり鈴木隊に寄つたりしたので測定出来なかつたけれど、そんなことはもう問題でない。

大唐墟の山上で我等の部隊長に計畫ルートや鐵道と道路との交叉關係など説明してゐる時、澤山の戦車が北進して行つた。がら／＼四圍の山々に反響させながら自由自在な快走ぶりである。歸途には渾樓の坂路で自動車群と行き合つたが樂々で行進交叉が出来た。自動車の群列は素晴らしい速度で疾走して行つた。その積荷も前よりは多かつた。

最近頗る輸送が頻繁になつた。歩兵部隊は既に行つた。戦車隊も前進した。軍參謀と部隊長との話の中にも窺はれたが、どうも近く龍州方面に新作戦が展開されるらしい。その方面には援將鐵道もあつて我々の部隊も亦新作戦に参加するらしい。是非早く行きたいものだ。

宿舎へ戻つて眞裸になる。酒れ切つた筈の汗が拭いてもく／＼だ流れる。身體は熱病のやうにかつ／＼と燃える。

夜蠟燭の光で前月分の陣中日誌を檢閲しながら、土木課の連中から今日届いた慰問袋を開き、名物羊羹を嬉しく噛む。

螢が屋内までも這入り込んですい／＼と飛んでゐる。(終)

若葉吟社詠草

霞むぞや燕すい／＼牛眠る
 風晴れを霞の奥の瀬鳴かな
 釣の友並ぶや川邊暖かに
 山小屋の窓明か／＼と春日ざし
 連捷の戦果いみじや御代の春
 軒晴や兵送る家に燕來る
 風晴れて燕來にけり港町
 秣刈るや祖母も手傳ふ暖かさ
 暖かや船より見ゆる漁家の桃
 歌疲れの眼に横たふや春の山
 春の陽に面子せぬ子の獨り居り
 戦況に胸ふくるゝ日燕來る
 芝晴や勤勞奉仕の鋏ぬくし
 大漁の港町晴れ乙鳥來る

○

野狐禪
 同 野
 同 路
 同 鳥
 同 農
 同 山
 同 翠
 同 茅
 同 淺
 同 一
 同 正
 同 水
 同 葉
 同 玉
 同 如
 同 如
 同 靜